

## 第7章 名蔵シタダル海底遺跡と15世紀の先島

谷川 章雄

### 1. 名蔵シタダル海底遺跡と出土陶磁器の位置づけ

ここでは本書の総括的記述を試みるとともに、名蔵シタダル海底遺跡と同時代の文献資料である、先島に漂着した朝鮮人の見聞を記した『李朝実録』の記事を考古学的視点から検討し、名蔵シタダル海底遺跡の意義を考えてみることにしたい。

#### (1) 名蔵シタダル海底遺跡の調査・研究史

名蔵シタダル海底遺跡の調査・研究史については、すでに詳細に記述されているが（註1）、その過程は大略以下のように時期区分できるだろう。

- ①1960～70年代 「発見と踏査」の時代
- ②1980年代 「調査」の時代
- ③1990年代 「停滞」の時代
- ④2000年代 「沈没船・対外交流への関心」の時代

1960～70年代は発見と踏査による表面採集の時代であった。名蔵シタダル海底遺跡は1960年に大濱永亘氏によって発見された。1961から63年にかけてジョージ・H・カー氏、リチャード・ピアソン氏らが遺跡を踏査し、ピアソン氏はこの遺跡を難破船（shipwreck）と考えている。これに対して、1975年に遺跡を踏査した三上次男氏は難破船ではなく、海岸に集落があり、港とする説を示した。1978年にこの遺跡出土の中国陶磁器を報告した大濱永亘、関口廣次両氏は、名蔵シタダル海底遺跡の性格をめぐる見解を（A）港とする説、（B）沈没船とする説、（C）台風などのため荷がこぼれたとする説に整理し、（B）もしくは（C）をより妥当な説としている。

こうした名蔵シタダル海底遺跡をめぐる議論は、1980年代に引き継がれていく。この時期には相次いで遺跡の調査が行なわれた。1980年、ジョージ・H・カー氏は名蔵シタダル浜および海底の調査を行い、沈没船であるという見解を述べている。1985年には、沖縄石垣島海中発掘調査団（団長・茂在寅男氏）の調査によって、シタダル浜の前に2列のサンゴ石灰岩を組み合わせた護岸のような遺構が発見され、これを船着場すなわち港であるとした。しかし、その後、この遺構は大正3年（1914）につくられた御木本真珠株式会社の名蔵湾真珠養殖場の施設であることが判明し、港とする説の根拠にはならないだろう。

1990年代の調査・研究は、大濱永亘氏の地道な活動はあったが、新しい進展は見られなかったようである。ところが2000年代に入ると、名蔵シタダル海底遺跡は再び注目を集めるようになる。それは、近年の研究動向において、日本・琉球・中国・朝鮮・東南アジアなどに広がる中世の東アジア海域の交流・交易の問題がとり上げられ、その実態を示す沈没船の資料が改めて評価されるようになったからであろう。すなわち、名蔵シタダル海底遺跡は、15世紀の先島の対外交流・交易を物語る重要な遺跡として位置づけることができるのである。

#### (2) 名蔵シタダル海底遺跡出土陶磁器の様相

本書で報告した名蔵シタダル海底遺跡出土の陶磁器は、大濱永亘氏がほぼ半世紀にわたって採集したもの

である。今回行なった緻密な分析によれば（註2）、青磁小片を除いた総点数3,461点、青磁が2,845個体、白磁が440個体とその大部分を占め、青花は総破片数69点と少ない。鉄釉壺・甕類は底部から胴部への立ち上がりが残存した破片が117点あった。

青磁の94%が碗で、内訳は内底面無文のものが63%、内底面無釉・蛇の目釉剥ぎのものが2.3%、明らかに花文の印文とわかるものが15%あり、その他・不明の多くが花文の印文であるという。点数は少ないが、「崩れた雷文タイプ」と「やや退化した線刻蓮弁文タイプ」の碗が見られる。

名蔵シタダル海底遺跡の特徴的な製品として注目される「顧氏」銘印の青磁碗・鉢は12個体あった。「顧氏」銘青磁は、龍泉窯の陶磁器製造業者であった顧仕成に由来するものである。関口廣次氏は「顧氏」銘青磁を3期に大別し、本遺跡をはじめ日本で出土するかなりのものが15世紀第3四半期～第4四半期の製品に相当すると指摘している。また、これらの名蔵シタダル海底遺跡出土の青磁は、浙江省龍泉窯の製品でおそらく慶元県竹口地域を中心とする窯のものであるという。

白磁のうち小皿は98.9%を占めており、小皿の81.7%が割高台白磁小皿であった。割高台は4分割のものと5分割のものがあるが、前者が90%以上であったと推定されている。

底部が完全に残存しているもので見ると、aタイプ（胴部下半から高台部、底部にかけて無釉もしくは釉の掛け残しのあるもの）は少なく、bタイプ（全面施釉のもの）が93.1%を占めていた。こうした割高台白磁小皿は、福建省邵武市四都地域で生産されたおそらく最も廉価な陶磁器であり、沖縄や日本にもたらされたものであるという。

青花の器種は碗・皿類であり、主な内底面の青花文様は捻り菊文・梅枝文・寿字状梅枝文である。これらは15世紀第3四半期～第4四半期に位置づけられる。

鉄釉はかつて沖縄県で「南蛮」と称されていた一群の壺・甕類で、名蔵シタダル海底遺跡出土のものは、肥厚口縁タイプの甕を主として、口縁がラップ状に開くタイプが次ぎ、タイ産といわれる壺や口縁が玉縁状で頸部が直立するタイプのもの若干見られる。

以上述べてきたような名蔵シタダル海底遺跡出土陶磁器は、明代である15世紀第3四半期～第4四半期の一括遺物であり、その数量から見ても沈没船である可能性が高いと考えられる。これらの陶磁器は福建省沿岸の福州・定海地域で集積されて船の積荷となったものと推定されるのである。

### (3) 14～16世紀の先島の遺跡

すでに述べられているように（註3）、名蔵シタダル海底遺跡が営まれた時期を含む14～16世紀の先島の遺跡の様相が明らかになっている。

この時期の石垣島の遺跡の立地は以下のように分類できるという。

- ① 海岸低地砂丘：喜田盛遺跡・平川貝塚・石垣貝塚・登野城遺跡・ウフスク村遺跡（カンドゥ原遺跡）
- ② 展望のきく小高い丘や岬：野底石崎遺跡・野底崎遺跡・川平貝塚・川平火番岡遺跡
- ③ 琉球石灰岩上および丘陵の先端部：フルスト原遺跡・富野遺跡
- ④ 緩やかな傾斜地：仲筋貝塚

集落の形態は石垣で囲まれた屋敷からなる遺跡と石垣をとまわらない遺跡に大別される。前者は石垣島フルスト原遺跡・富野遺跡や竹富島新里村西遺跡、波照間島ブリブチ遺跡・マシユク村跡などがあり、フルスト原遺跡内には近世の古墓や御嶽なども存在する。後者は喜田盛遺跡・平川貝塚・石垣貝塚・登野城遺跡な

どで、登野城遺跡では生活域と墓域を明確に区分していた。

墓は、14世紀以降になると、土壙墓・岩陰墓・石組墓・石棺墓など埋葬施設の構造が多様化し、集団墓も出現するという。

こうした石垣で囲まれた屋敷からなる集落形態や、多様な埋葬施設の構造、集団墓の出現などの墓あり方からは、社会的関係の強化をともなう階層化した社会構造をうかがうことができるという。また、遺跡数は15世紀になると増加する傾向にあり、この時期に中国陶磁器の出土量が増えることも注目される。

## 2. 『李朝実録』にみる15世紀の先島

『李朝実録』は、朝鮮の李朝の歴代国王を中心にした記録である。そのなかに琉球国に関する記事があることは、古くから知られていた。

昭和2年(1927)に発表された伊波普猷氏の「朝鮮人の漂流記に現れた十五世紀末の南島」(註4)は、『李朝実録』の与那国島に漂流した朝鮮の済州島民の見聞した記録をもとに、当時の沖縄の生活や習俗を明らかにしたものである。昭和16年(1931)には東恩納寛惇氏が『黎明期の海外交通史』のなかで、『李朝実録』の記事をもとに琉球と朝鮮の交渉について論じた(註5)。その後は、1971年に高崎彰氏の「李朝実録より見た15世紀末の南西諸島・先島社会」(註6)が発表されている。

また、『李朝実録』の琉球関係記事を訳したものは、李熙永氏の「朝鮮李朝実録所載の琉球諸島関係資料」(註7)や嘉手納宗徳氏の「李朝実録抄(琉球関係資料)」(註8)・『李朝実録琉球史料』(註9)があり、近年では和田久徳氏らによる「李朝実録の琉球国史料(訳注)(一)～(十二)」が発表されている(註10)。

上述の伊波普猷氏がとり上げた、『李朝実録』の「成宗実録」成化15年(1479)6月乙未(16日)条には、成化13年(1477)2月に与那国島に漂流した済州島民金非衣等3人の見聞を記した記事がある。彼らは2月1日に済州島を出航したが暴風に遭い、14日目に与那国島に漂着した。そして、およそ6ヵ月後の7月晦日に与那国島を出発し、琉球国(沖縄本島)を経て2年数ヵ月後に帰国した。

この見聞の記録は、名蔵シタダル海底遺跡と同時代の先島を知ることができる貴重な文献資料である。とくに、長期に滞在した与那国島に関しては、生活や習俗などに関する詳細な記述があり、帰国の際に立ち寄った西表島祖納・波照間島・新城島・黒島・多良間島・伊良部島・宮古島・琉球国についても、生活・習俗などが記されている。ここではこの記事に見られる考古学的知見に関わる記述を検討することにした(註11)。

### (1) 農 耕

当時の先島の農耕に関しては、次のような記述がある。

与那国島 「専ら稲米を用う。粟有りとも、種うるを喜ばず。」

西表島祖納 「稲と粟を用う。粟は稲の三分の一に居る。」

波照間島 「黍・粟・<sup>おむぎ</sup>牟麦有り。水田無し。」

新城島 「黍・粟・<sup>おむぎ</sup>麩麦(大麦)有り。稲無し。」

黒島 「黍・粟・<sup>おむぎ</sup>麩麦有るも、稲無し。」

多良間島 「黍・粟・<sup>おむぎ</sup>麩麦有るも稲無し。」

伊良部島 「黍・粟・麩麦有り。稲は麩麦の十分の一に居る。」

宮古島 「稲・黍・粟・牟麦有り。」

ここで注目されるのは、波照間島・新城島・黒島・多良間島では稲作が行なわれていないと記している点である。すなわち、稲作が先島全域に広がっていたかどうかは、今後の検討の余地があり、地域ごとに農耕のあり方が異なっていた可能性が考えられるのである。

一方、考古学における自然科学分析のなかの植物珪酸体分析によって、農耕の存在を知ることができる。植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（註12）。

先島におけるこれまでの植物珪酸体分析の結果を見てみると、グスク時代に並行する以下の遺跡で土器や土壌からイネの植物珪酸体が検出されている（註13）。

石垣島ピロースク遺跡（土器）

石垣島フルスト原遺跡（土器・土壌）

石垣島喜田盛遺跡（土器）

石垣島富野岩陰遺跡（土器）

宮古島根間西里遺跡（土器）

宮古島住屋遺跡（土器・土壌）

宮古島砂川元島（土壌）

なお、遺跡の土壌から検出されたイネの植物珪酸体の形状解析を行なった結果、形状と判別得点から推定すると、畑稲作にも適したイネである熱帯ジャポニカの可能性も考えられるという。

また、仲筋貝塚から出土した土器について植物珪酸体分析を行なった結果、一部の試料からイネが検出され、少なくとも15世紀中葉から後半代には稲作が行なわれていたことが確認された（註14）。

こうした分析結果は、先述の済州島民の見聞の記録と基本的に矛盾するものではないだろう。とくに植物珪酸体分析に関して言えば、今後は地域差を考慮する必要があるとともに、イネ以外のムギ類、アワが含まれるエノコログサ属型、キビが含まれるキビ属型などにも留意するべきであろう。あわせてこの時期の土器の生産と流通のあり方も追究していくことも考えなければならない。

済州島民の見聞の記録からは、与那国島の農耕の具体的な様子もうかがい知ることができる。鉄製の小さなスキ、ヘラを用いて田を耕し、草を取り、粟を蒔いたという。これは民具のフィーラー、ピーラーなどと称する小型の農具を想起させる。また、十二月に牛による踏耕（蹄耕）によって水田を耕し種蒔きをしていたが、踏耕は南島の民俗に残っていた。稲の収穫前に人々は皆謹慎し、話はしても声をはりあげたりせず、口をひそめて嘯くこともしなかったという習俗は、穀霊信仰によるものであろう。また、収穫した稲は扱箸（こき）で脱穀し、搗臼でついた。

波照間島では大麦を蒔くときに、牛糞を手ですくって田に撒き、スキで土を起してその上に被せたという。西表島祖納では、収穫した稲を「近居の閑地に積む。高さ俱に二丈（1丈=10尺）許りなり。」とあり、稲積の記述が見られる。

先島の野菜については、以下のように記されている。

与那国島：蒜・茄子・真瓜・蹲鴟・生薑

西表島祖納：蹲鴟・冬瓜・薑・蒜・茄子・瓠

波照間島・新城島：茄子・蹲鴟・蒜・瓠

黒島・多良間島：蒜・蹲鴟

伊良部島：蒜・蹲鴟・薑

宮古島：蒜・西瓜・茄子・蹲鴟

こうした栽培植物の起源と伝播の経路や時期は、重要な問題であろう。なお、西表島祖納では、「薯蕷（やまのいも）」を切って、煮て食べていた。

## (2) 家畜と狩猟

家畜に関しては、全ての島で牛・鶏・猫が飼育されていた。「狗」を飼っていたのは、西表島祖納と宮古島であるが、後述するように、西表島祖納では獵犬であった。また、「牛を屠りて之を食す。鶏肉を食さず。」という島がほとんどであった。与那国島では牛・鶏の肉を食べずに、死んだときには埋めたという。こうした家畜のなかで、牛の飼育は重要であろう。すでに指摘されているが（註15）、牛の骨を利用した尖頭器や篋などが製作されている。

イノシシの狩猟については、西表島祖納で「島人、槍を持ち狗を牽き、之を獵捕す。其の毛を熏き剥きて之を煮る。」とある。これは南島で最も古いと考えられている「犬を使用し槍で突留める方式」で、奄美大島ではイヌヤマ、国頭地方ではインビチ（犬引）と称する獵法であろう（註16）。

なお、与那国島では布を織るときに箒や杼を用いた。草や稲を刈るには鎌を用い、木を伐るには斧や手斧を使用した。舟には舵や棹はあるが櫓はなく、順風に帆を懸けるだけだった。鍛冶があり、武器には小刀はあるが弓矢や「斧戟（武器の一種か）」はなく、人は小鎗を持ち普段でも離さなかったと記されている。

## (3) 住居

与那国島の住居は、一室で奥座敷や戸、窓はなく、前面はやや軒があがっており、後面は庇が地面に垂れている。屋根は茅を葺き、瓦はない。外に垣根はない。主屋の前に高倉を建てて、収穫した稲を貯蔵する。家に便所はない。ちなみに、宮古島では家に便所があるという。地面を掘って小井を作り、水を汲むのに「瓢罍（大きなヒョウタンか）」を用いた。また、「灯燭無し。夜は則ち竹を束ねて炬（灯り）を為り、以て之を照らす。」とある。

考古学的知見によると（註17）、この時期の集落には堅穴住居・掘立柱建物・倉庫などの遺構が認められる。

## (4) 食生活

与那国島の調理用具や食器に関しては、釜や鼎、匙と箸、皿や鉢、磁器や瓦器はないという記述がある。これは考古学的知見とは必ずしも一致していないように思われる。

「土を埴めて鼎を作り、日に曝して之を乾かし、薰くに藁火を以てす。炊飯すること五・六日にして輒ち破壊す。」という記事は、土器について述べたものである。飯は「竹筥（竹製の四角い箱）」に盛り、「小木几（木の膳か）」を各人の前に置いたという。また、「海水を以て菜を和し羹を作る。器は瓠子を用う。或いは木

を瓢<sup>えく</sup>りて之<sup>つく</sup>を為る。」とある。なお、宮古島では、飯を炊くときには「鉄鼎」を用いた。これは足がなく釜に似たもので、琉球国からの交易品であったという。

酒については、与那国島では「酒は濁有りて清無し。米を水に漬け女をして嚼ましめ糜（濃い粥）と為し、之を木桶<sup>かも</sup>に醸す。麴<sup>ひまこ</sup>（麴）を用いず。（中略）酌<sup>ひまこ</sup>むに瓢<sup>ひまこ</sup>子を用す。」と記されており、いわゆる口嚙の酒であった（註18）。伊良部島では、酒を醸すのに米麴を用いていた。

その他、与那国島では、米を搗臼でついて丸めて餅を作り、ピロウ（クバ）の葉で包み藁で束ねて、煮て食べたという。これは鬼餅（もちひ）の民俗として残っている（註19）。

西表島祖納・波照間島・黒島・伊良部島・宮古島では、「蝸を煮て之を食す。」とある。これは石垣島の遺跡から出土するオキナワウスカワマイマイという陸産の貝にあたと考えられる。石垣島の民俗例では、カタツムリは汁物や酢の物にされたようである。とくに雨降りのときには2、3升も獲れるので、壺の中に入れておいて糞を出させて、ういきょうと煮て汁物にしたという。また、タニシとともに下げ葉で肝臓病、腎臓病に効き目があるという（註20）。

## (5) 装身具

玉類などの装身具については、以下のようなやや詳しい記述がある。

与那国島「耳を穿ち貫くに青小珠を以てし、垂るること二・三寸許りなり。又、珠を貫き項<sup>うなじ</sup>を繞ること三・四匝（めぐり）、垂るること一尺許りなり。男女同じ。老者は否<sup>しから</sup>ず。」

西表島祖納「婦人は鼻の両旁を穿ち小黒木を貫く。状、麤<sup>ぼくろ</sup>の如し。足脛に小青珠を繞繫す。其の広さ数寸許りなり。」

波照間島「男女耳を穿ち小青珠を貫き、亦た珠を串<sup>つらぬ</sup>きて項に掛く。」

新城島「青珠を以て臂（肘から手首まで）及び脛<sup>すね</sup>に繞繫す。男女同じ。」

このように、八重山では男女を問わず「青珠」「小青珠」「青小珠」を耳や項、肘から手首、脛などに飾っていたようである。「青珠」「小青珠」「青小珠」は、遺跡から出土するガラス製丸玉・小玉にあたるものであろう。

一方、宮古では婦人が「水精（水晶）の大珠」を項に掛けていた。

伊良部島「婦人は、水精の大珠を項に掛く。」

宮古島「婦人、珠を項に掛くことも亦伊羅夫島（伊良部島）と同じ。」

宮古島砂川元島遺跡からは水晶製棗玉が出土している。グスク時代に並行する12世紀以降の先島では、前代の無土器の遺跡から貝製や骨製の垂玉・玉・小玉が出土していたのに対して、石製勾玉とガラス製丸玉・小玉が多く出土するようになる（註21）。こうした考古学的知見は、上述の済州島民の見聞の記録と基本的に矛盾するものではないだろう。

## (6) 墓

墓に関する記述は少ない。与那国島では、「人死すれば則ち棺中に坐置し、厓<sup>がけ</sup>下<sup>がけ</sup>に置き、之を埋むるに土を以てせず。若し厓<sup>がけ</sup>広ければ則ち五・六棺<sup>なら</sup>を并べ置く。」とある。これは風葬を示すものであり、考古学的知見では崖葬墓にあたるものである（註22）。

## (7) 先島から琉球国へ

濟州島民が与那国島から琉球国（沖縄本島）に至る経路は、以下のようであった。

与那国島（閩伊是麼）→西表島祖納（所乃是麼）→波照間島（捕月老麻伊是麼）→新城島（捕刺伊是麼）  
→黒島（歙伊是麼）→多良間島（他羅馬是麼）→伊良部島（伊羅夫是麼）→宮古島（覓高是麼）→琉球国  
（沖縄本島）

こうした経路を見ると、なぜ石垣島に寄らずに多良間島に行ったのかという疑問が残る。伊波普猷氏はこの問題について、次のように述べている。

それ（朝鮮人の漂流＝引用者）から二十年経って、石垣島でアカハチ（赤頭）・ホンカハラ（大酋長カ）が反旗を翻した時、三千（？）の沖縄勢が同島に侵入したのを見ても、この頃の同島が全部不毛の地ではなかったことは明らかであるが、アカハチが波照間島からやって来て、この島で大勢力を得たところを見ると、朝鮮人が漂流した頃の石垣島は各島のならず者が寄合った物騒な新開地で、まだ八重山諸島の政治的中心にはなっていなかったような気がする。

そして、伊波氏は「石垣島は多分当時はマラリアが後世よりももっと猛烈で、住み心地のいい所ではなかったであろう」と推定している（註23）。

しかし、前述のような考古学的所見にもとづくならば（註24）、この時期の石垣島の遺跡からは当時の階層化した社会構造をうかがうことができ、遺跡数が15世紀になると増加し、中国陶磁器の出土量が増えることから考えると、伊波氏の見解にはやや違和感を覚える。つまり、遺跡のあり方から見る限り、石垣島は15世紀の八重山諸島の政治的・文化的中心のひとつではないと断定することは難しいのである。

濟州島民の見聞によると、西表島祖納では「山、材木多し。或いは輪載し他島に貿易す。」とある。一方、波照間島では材木がないので西表島祖納から入手しており、多良間島でも西表島祖納や伊良部島から得ていることが記されている。また、波照間島では「水田無し。稲米は所乃島（西表島祖納）に貿易す。」とあり、新城島や黒島でも同様であった。すなわち、材木や稲の交易が石垣島ではなく西表島祖納を中心に行なわれていたのである。

これは、伊波氏が説くように石垣島が八重山諸島の政治的中心になっていなかったというよりは、むしろ、八重山から宮古を経て琉球国に至る日常的な交易ルートのひとつから基本的に外れていたことを意味するのではなからうか。先述のように、濟州島民の見聞によると、宮古島の「鉄鼎」は琉球国からの交易品であった。

島村幸一氏は、「南島歌謡にみる交易—宮古島と八重山を中心に」（註25）という論考において、宮古島の勢力の八重山支配の動きは1500年のオヤケ・アカハチの乱以前からあり、それは宮古島が西表島の材木を求めて交易を行ない、宮古島の神（英雄）が八重山の娘を娶うように通婚圏が拡大していくことであったと述べている。そして、島村氏は「宮古島の勢力が西表島の材木を集積し造船を行っていた基地が、黒島、もしくは新城島ではなかったか」とし、さらに「与那国島にまで勢力を伸ばしていたのではなかったか」と推測している。こうした見解は今後の考古学的検討を必要とするが、少なくとも濟州島民の与那国島から宮古島に至る経路は、八重山と宮古島との交易ルートのひとつであったと思われる。これまで検討してきた濟州島民の見聞の記録は、名蔵シタダル海底遺跡と同時代の先島を知ることができる貴重な文献資料であるが、他方で、彼らのたどった道から当時の石垣島の独立性を読み取ることができるのではなからうか。

そうした石垣島の独立性は、福建省沿岸の福州・定海地域を出航し名蔵シタダルの海底に沈んだ沈没船が

直接に物語るものであり、1500年のオヤケ・アカハチの乱は八重山支配と石垣島の交易の利潤をめぐる争乱であったという解釈も成り立つように思われる。今後詰めなければならない課題は多いが、名蔵シタダル海底遺跡が提起する問題は先島の歴史にとって大きいことは疑いないのである。

#### 註

1. 本書第1章参照。
2. 本書第2章参照。
3. 本書第3章参照。
4. 伊波普猷「朝鮮人の漂流記に現れた十五世紀末の南島」(『をなり神の島』1 東洋文庫 平凡社) 1927年。
5. 東恩納寛惇『黎明期の海外交通史』帝国教育会出版部 1931年。
6. 高崎 彰「李朝実録より見た15世紀末の南西諸島・先島社会」『第10次沖縄八重山調査隊—与那国島調査報告』早稲田大学アジア学会 1971年。
7. 李熙永「朝鮮李朝実録所載の琉球諸島関係資料」『沖縄学の課題』叢書わが沖縄第5巻 木耳社 1972年。
8. 嘉手納宗徳「李朝実録抄(琉球関係資料)」『日本庶民生活史料集成』第27巻 三一書房 1981年。
9. 嘉手納宗徳『李朝実録琉球史料』第1～4集 松濤書房 1982・1983年。
10. 和田久徳ほか「李朝実録の琉球国史料(訳注)(一)～(十二)」『南島史学』36～39・43～47・49～51 南島史学会 1990～1992・1994～1998年。
11. 本稿では『李朝実録』の記事は、和田ほか 前掲文献(註10)に拠った。
12. 杉山真二「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社 2000年。
13. 宇田津徹朗「石垣島における稲作の起源を追って—プラント・オパール分析法を用いた検討—」『石垣市史のひろば』28 石垣市総務部市史編纂課 2005年。
14. 谷川章雄「一五世紀の沖縄先島の農耕をめぐる—石垣島仲筋貝塚出土土器の植物珪酸体分析—」『東アジアの歴史・考古・民俗』早稲田大学アジア研究機構叢書人文学篇第2巻 2009年。
15. 本書第3章参照。
16. 千葉徳爾『続狩獵伝承研究』風間書房 1971年 p73～76。
17. 本書第3章参照。
18. 伊波 前掲論文(註4) p63～64。
19. 同上 p64。
20. 宮城 文『八重山生活誌』1972年。
21. 谷川章雄「沖縄の玉とその交易」『日琉交易の黎明』森話社 2008年。
22. 本書第3章参照。
23. 伊波 前掲論文(註4) p76・77。
24. 本書第3章参照。
25. 島村幸一「南島歌謡にみる交易—宮古島と八重山を中心に—」『日琉交易の黎明』森話社 2008年。



沖縄県石垣島  
**名蔵シタダル海底遺跡共同研究報告書**

—大瀨永亘氏調査収集資料を中心に—

印刷 2009年3月

発行 2009年3月

発 行 先島文化研究所（大瀨永亘 主宰）  
〒907-0024 沖縄県石垣市字新川41

TEL・FAX : 0980 (82) 6309

印 刷 株式会社 第一印刷所  
〒950-8724  
新潟県新潟市中央区和合町2丁目4番18号  
第一和合ビル内

T E L : 本社代表 025 (382) 7400  
東京本部 03 (3871) 4261